

初旅

涼野海音

坂道の上は母校や鳥雲に
鳥帰るかすかに空を揺らしつつ
ゆふぐれの一木と春惜しみけり
屋上へ出てメーデーの海を見つ
夏来る父の机のエアメール
初夏の木の下に読む手紙かな
梅雨寒の背広に街のにほひあり
ピアスより風をつめたし花あやめ
地下鉄の駅に一人や桜桃忌
かたつむり詩人の家のしづかなる
父の日の切り岸を石落ちゆけり
ボクシングジムの窓辺の水中花
草に落つ別れたる夜の青胡桃
球場の声はるかよりソーダ水
空海もわれもめとらず雲の峰
草笛を吹きつつ朝の艇庫まで
炎帝の湖へ雲飛ばしけり
振り向けば長き道あり木下闇
晴れゐたる屋島へ草矢放ちけり
ゆく夏の地図に小さき岬かな
草の上のうづらの卵終戦日
鳥渡るころろにいつもみすゞの詩
種採の後ろの鐵路しづかなる
黄落や膝につめたき黒靴
小春日の車掌筆談してゐたり
短日や子どもの走る家具売場
東京へしばらく行かず日向ぼこ
極月や瀬戸大橋の灯のとほき
灰色のカフカ全集年ゆけり
初旅の水湧く町の日向かな